武蔵国分寺跡資料館だより

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum Newsletter

編集・発行・印刷

見る／学ぶ／訪ねる／
武蔵国分寺跡資料館
Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

[住所] 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10
[電話] 042-323-4103 [FAX] 042-300-0091
[E-mail] museum@city.kokubunji.tokyo.jp
[HPアドレス]
http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/1733/009819.html

2014.8
第19号

Temporary Exhibition

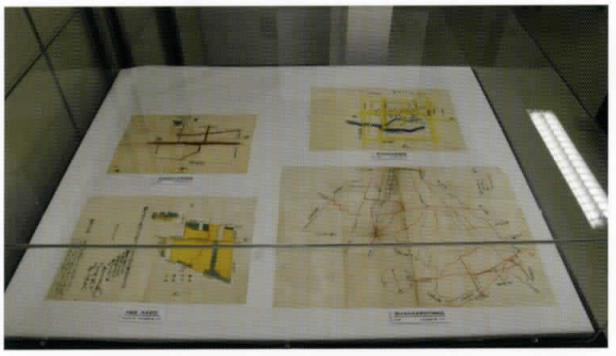
国分寺市市制施行50周年記念事業　特別展示事業

～国分寺市の今昔～

■開館時間　9：00～17：00（入館は16：45まで）
■期　　間　前期『近現代～近世』（夏季展示）
平成26年7月19日(土)～10月5日(日)
後期『中世～原始』（秋季展示）
平成26年10月10日（金）～平成27年3月1日（日）
■会　　場　武蔵国分寺跡資料館
■入 館 料　「おたかの道湧水園」への入園料が必要
■休館日　月曜日（祝・振替休日の場合は直後の平日、10月7日（火）～9日（木）の間は展示替えのため、臨時休館いたします。

武蔵国分寺跡資料館では、毎年数回の企画展を開催しています。今回は市制50周年の節目をきっかけに、市内外の方々により深く国分寺市の歴史について知っていただくため、特別展示を企画いたしました。

原始・古代・中世・近世・近現代の中から、地域の通史上トピックになる約50項目のテーマを選出し、歴史の流れを遡る形で配列します。内容は政治・経済・文化などの広範囲に及びますが、「人々の日々の暮らし」を全体のテーマとして設定し、生活の様子や文学・芸術をはじめとする文化面等にも着目いたします。また、市を象徴する武蔵国分寺や水に注目し、国分寺崖線や台地に住んできた人々の都市文化、社会組織、生業、交通、交易、衣食住、信仰、年中行事等を取り上げます。展示を通じて、国分寺市のこれまでの歩みと、地域独自の風土を読み取っていただけましたら幸いです。

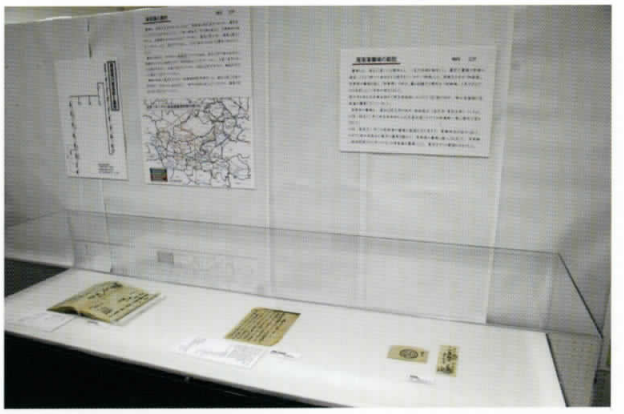


「国分寺村・本多新田の村絵図に見える道」

－前期展示構成－

戦時下の国分寺市域と防空壕／衣類～子どもの着物～／国分寺の消防組織／郷土料理～本多新田流手打ちうどん作り～／農業～国分寺の畑、田～／交易圏～野中新田・榎戸新田の購入地域から～／国分寺の職人～下駄職人～／年中行事／地域組織～国分寺の講～／名産品～国分寺のうど～／国分寺に訪れた人々～柳屋旅館の宿帳から～／並木町の水車と精麦・精米・製粉業／国分寺の生活用水／子どもの遊び／明治期の鉄道建設／私鉄の開業と住宅地開発／品川御台場の築造と国分寺村／江戸時代の人口／国分寺村・本多新田の村絵図に見える道／尾張藩鷹場の範囲／尾張藩の鷹狩／新田の開発

「衣類～子どもの着物～」等



「尾張藩鷹場の範囲と尾張藩の鷹狩」

本町三丁目・南町一丁目発見の地下防空壕

はじめに

私たちが暮らす地面の下には、今から約３万５千年前に遡る旧石器時代の遺跡をはじめ、奈良・平安時代の武蔵国分寺に関連する遺跡など、様々な時代に営まれた生活の痕跡が市内の各所に埋もれています。国分寺市教育委員会では、開発に伴って消失する恐れがある文化財について所在や現況を確認するための調査を実施していますが、ここでは平成 25 年に調査を行い、記録に留めた２件の地下防空壕についてご紹介します。

戦争中に掘削された防空壕は、旧石器時代や奈良時代の遺跡と比べればごく最近のもので、「遺跡」とはいえないのでは･･･？、と疑問に感じる方もいると思います。しかし、考古学が研究の対象とする時代は、原始・古代はもとより、明治時代以降の近代・現代にまで広がってきています。最近では文化財保護の施策においても、戦時中に航空機を格納した現存するシェルターである旧陸軍調布飛行場の白糸台掩体壕が府中市の史跡となり（武蔵野の森公園内）、空襲の際に旧米軍機が発した機銃掃射の弾痕が外壁に生々しく残る、旧日立航空機立川工場変電所が東大和市の史跡に指定されるなど（東大和南公園内）、戦争に関連した遺跡を平和教育にも活かすため、積極的に保護の措置を図る自治体も増えています。

本町三丁目所在の地下防空壕

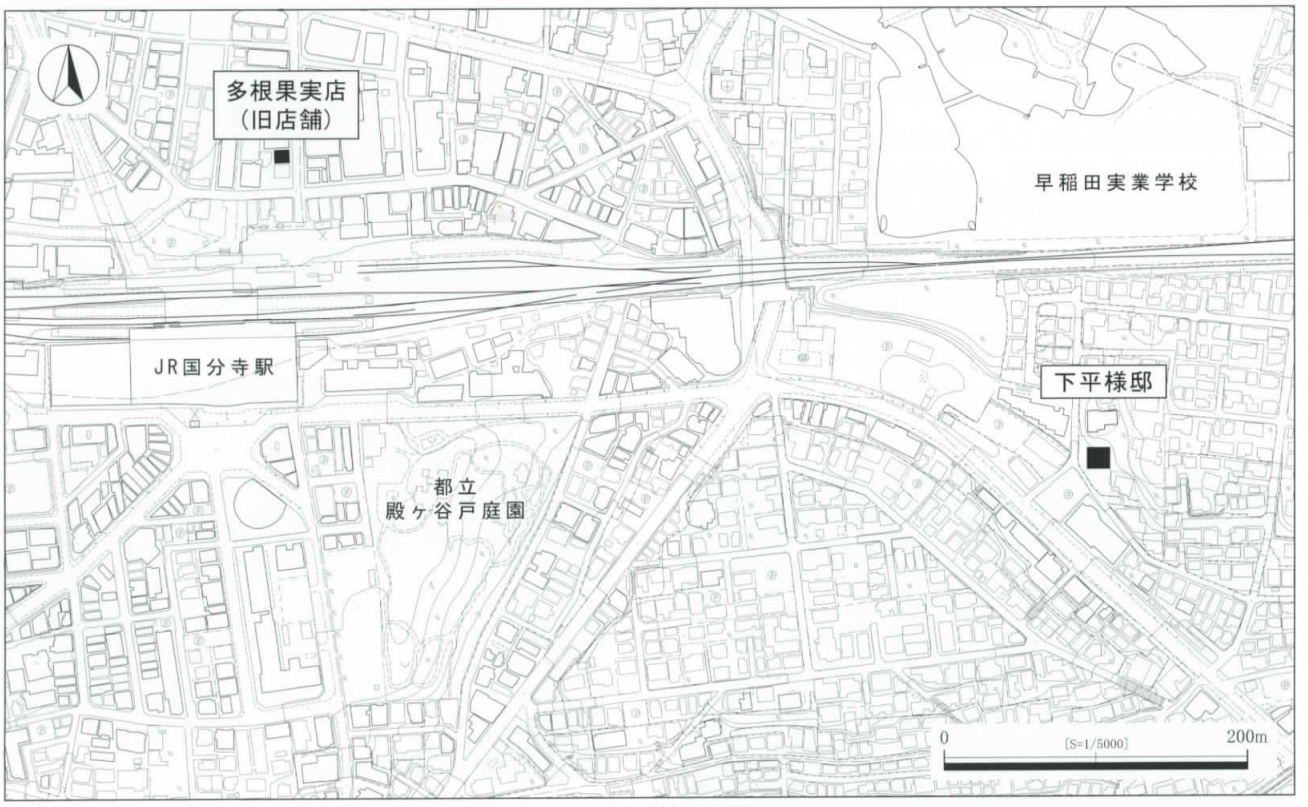
ＪＲ国分寺駅の北口では、現在、国分寺市が平成 30 年度の完了目標を掲げ、市街地再開発事業を進めています。計画地内では、ここ数年の間に数多くの店舗等の建物が立ち退きましたが、駅前通りと大学通りの交差点にほど近い、多根果実店の旧店舗もその一つです。所有者の方からは、店舗の床下に地下室が存在するという情報が市に寄せられ、再開発事業を計画・推進している国分寺駅周辺整備課の協力を得て、建物の除却工事に先駆けて 11 月７日に現地調査を行いました。

店舗の床面直下は立川ローム層第Ⅳ層が露出し、地下室は 90cm 角の方形の間口が 1.7mの距離を隔てて２箇所東西に並び、その上は鉄板で蓋が被されていました。室自体は関東ローム層の地山に対して素掘りで、竪坑は開口部から室底まで約 2.7mの深さを有します。地下室の平面は幅 1.9m、奥行 3.3mのやや東西に長い歪な形状をしていて、断面は天井の中心部分が最も高いドーム形で、天井高は 1.7mと人の背丈ほどの高さがあります。また、東壁面の中腹付近には棚状のテラスが設けられていて、その右奥壁には鉄製の扉が掛かっていました。

店舗の所有者であった延命利明さんのお話によると、先代の店主が戦前に店舗を構えた際に、当初は販売用の果実を保管する目的で掘った地下室でしたが、戦時中の空襲の時には家族がここで待避することもあったようです。また、その後もバナナ等の果実の貯蔵施設として近年まで使われていました。

南町一丁目所在の地下防空壕

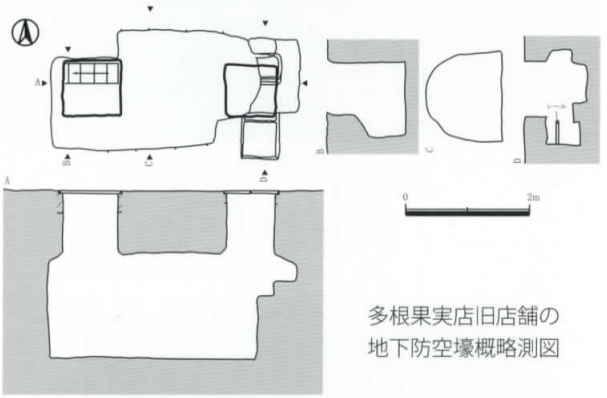
もう一つの事例は、個人住宅建設予定地で建物基礎工事の掘削作業中に、法面から複数の空洞が突如発見されたため、工事に立会った６月 24 に急遽現地で記録を残



地下防空壕発見地点位置図

JR 国分寺駅北口にあった多根果実店旧店舗跡（左から二軒目）

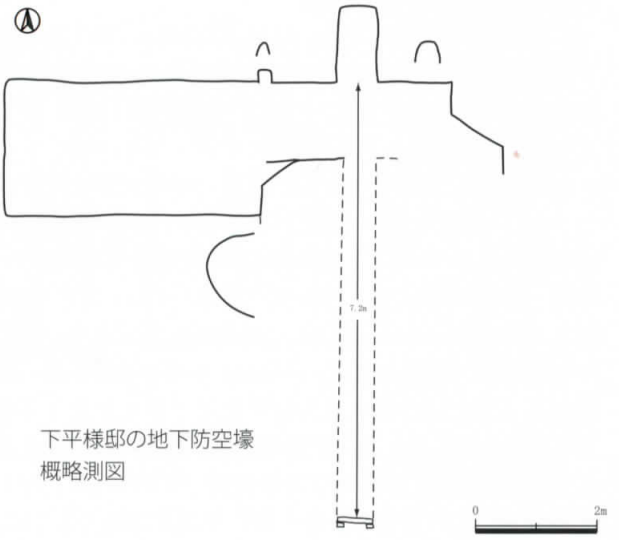
多根果実店地下防空壕西側開口部（地下室より）


多根果実店旧店舗の
地下防空壕概略測図

すこととしました。工事で室の天井や入口部は壊されて構造の詳細は不明ですが、国分寺崖線の斜面を利用した横穴状に掘られた地下室で、旧宅の庭先には木枠を巡らした開口部がありました（現在は消滅）。その開口部から奥壁までは7mほどの距離があり、突き当りで左右と正面側にそれぞれ1室、計3室の空間に分かれていました。完全に埋まりきってはいなかった西側の室の壁面奥には、掘削した当時の工具痕が明瞭に残っていましたが、室の内部には遺留品等は発見されませんでした。

所有者である下平龍平さんにお話を伺ったところ、既に世代が変わってしまい、戦時中の横穴であるのか、使用目的等の詳細は定かでは無い、とのことでしたが、当該地周辺の崖線沿いには同種の横穴状の防空壕が幾つも点在し（現在は危険防止のため、埋め立てられています）、近年まで子供たちの格好の遊び場となっていたことが知られています（藤田圭之介 2001「国分寺今昔」『平成13年度　保育室のあゆみ 18　保育室 30 周年特集』国分寺市立本多公民館）。

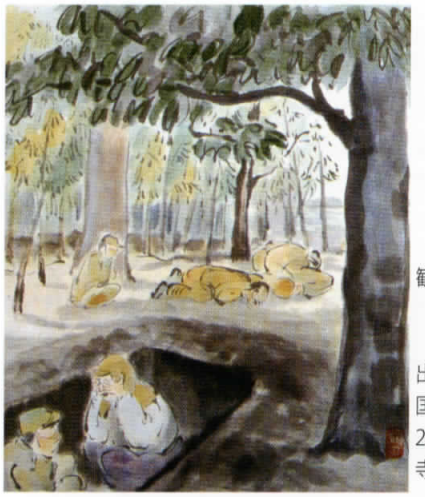
下平様邸の地下防空壕　工事中の発見状況（南東から）


下平様邸の地下防空壕
概略測図

おわりに

今年は第2次世界大戦の終戦を迎えて 69 年目になります。当時、幼少だった方も今ではご高齢になり、戦争を直接体験された当時の記憶を語り継ぐ機会が益々減ってきています。国分寺市域では、昭和 20 年6月 10 日に空襲を受けたという記録の一つに故佐藤多持氏の絵画資料があり、そこでは、西町に所在する観音寺境内の防空壕が描かれていますが、この他に防空壕に関して詳細な記録を留めた事例はありません。こうした戦争を物語る防空壕をはじめとした遺構が、市内にどれほど残っているかは現時点で不明ですが、今後も市教育委員会では機会を捉えて調査を進めていきたいと考えています。

（依田 亮一）


観音寺境内の防空壕
1945（昭和 20）年
（絵：佐藤多持）
出典：
国分寺市教育委員会
2007『ふるさと国分寺のあゆみ』より

おたかの道湧水園内歴史的建造物保存修理工事が始まります
市重要有形文化財（建造物）旧本多家住宅　長屋門

現在、おたかの道湧水園となっている場所は、江戸時代に国分寺村の名主を務めた本多家の屋敷地でした。入口にある長屋門と園内にある倉は、当時の面影を伝える貴重な建造物として、平成 24（2012）年２月に市重要有形文化財（建造物）に指定されています。これらの建造物のうち、特に老朽化が進んでいる長屋門について、平成 26 年秋（予定）より本格的な保存修理工事が行われることとなりました。

この長屋門に関しては、弘化５（1848）年「表御門　御長屋仕様御注文」という古文書が残っており、当時建築するにあたって注文された木材の種類と寸法、そして１階２階の簡単な平面図が描かれています。

ところで古文書の平面図と長屋門の現況を比較すると、いくつか異なっている点があります。主な相違点は、①階段の位置、②現況１階東側土間の北側張り出し部分・縁側・便所、③古文書１階東側六畳の「トコ」などです。また、古文書に「サス」という木材の記載があり、そこから小屋組（屋根を構成する骨組）が現在は和小屋（梁に対して束という垂直の部材を立てて棟木を支える構造）であるのに対して、創建時はサス構造（斜めに交差する２本の部材で棟木を支える構造）であったことがわかります。これらの古文書と異なる現況建物の造作は、後世の改造によるものであると推定されますが、昭和 40 年代の写真では、現況と同じ外観となっており、いつ改造が行われたのかは不明です。

今回の保存修理工事では、１階の増築部分を撤去し、小屋組をサス構造へと戻すなど、古文書が伝える弘化５年建築当時の姿に復原することを基本としています。屋根は茅葺であったと想定されますが、防火・維持管理上の理由から、鋼板で茅葺の外観形状のみを復原します。また、内部を普及・展示に活用できるよう構造補強を行って安全性を高め、空調や照明などの施設整備を行います。

工事のおおよその手順は以下のとおりです。

１．建物を構成する各部材を、手こわしにより１つ１つ順を追って解きほぐしながら全解体します。全ての部材には、使用箇所を特定するための番号を記します。土壁は丁寧に解体して、壁土はできるだけ再利用します。

２．解体工事と並行して、部材や礎石、基礎の整地状況等を調査し、創建当初の建物の様子とその後の変遷について考察を行います。新たな事実が判明した場合、設計・工事内容を修正していきます。

３．耐震補強のため、鉄筋コンクリート（厚さ約 20 ㎝）によるベタ基礎を設置します。

４．解体した部材に繕いなど修理を施し、建物を創建時の姿へ組み立てていきます。失われていた部材、破損の甚だしい部材は新規材に交換します。また一部、鋼板や鉄筋による構造補強を行います。

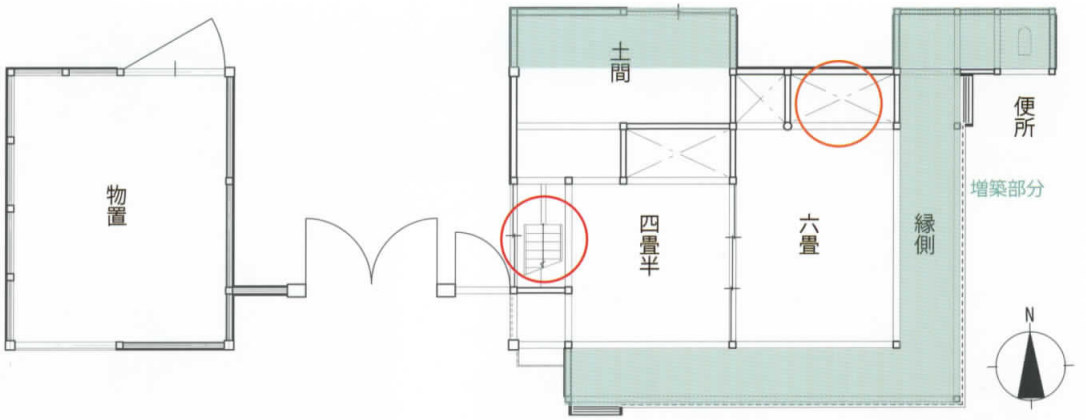
５．壁、建具などの建物仕上げ工事、電気・給排水施設設備工事、周辺植栽工事などを実施します。

完成・公開は平成 28 年秋の予定です。いずれかの段階で、工事現場見学会やワークショップ等を開催予定です。なお工事中、おたかの道湧水園への入園は、長屋門東側に設置する仮入園口より行っていただくことになります。来園の皆様には大変ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

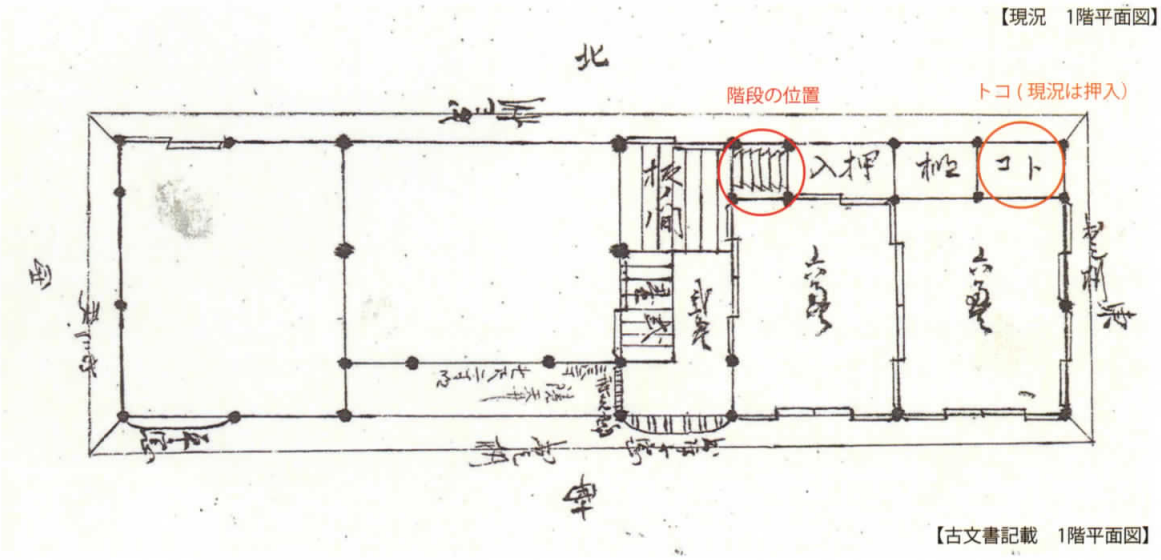
（野中　太久磨）

現在の長屋門

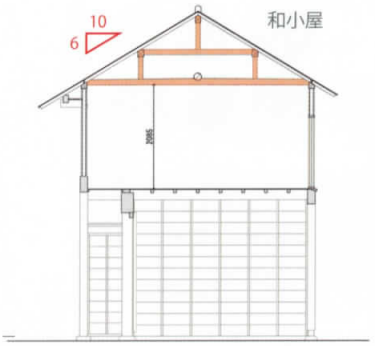
長屋門工事中の仮入園口案内図



【現況　1階平面図】

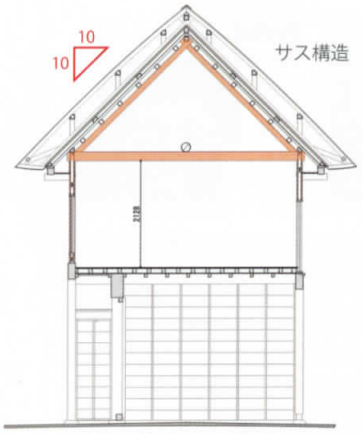


【古文書記載　1階平面図】

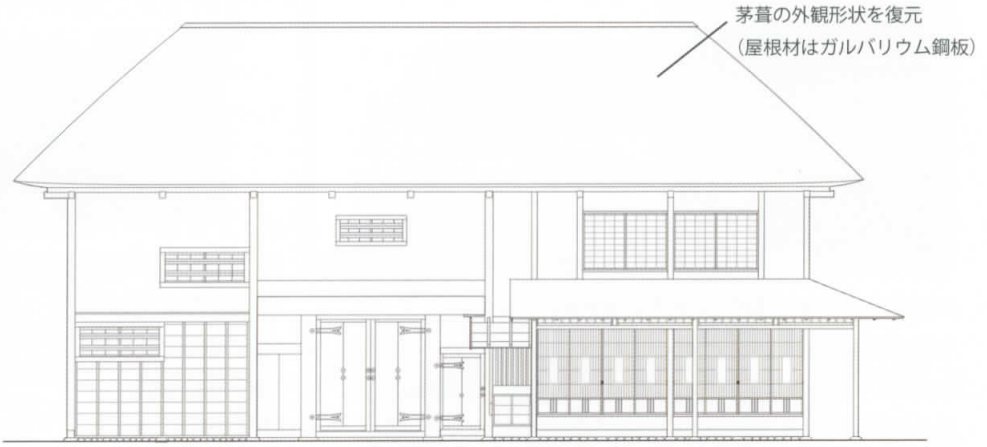


【現況　梁行断面図】

【現況　南立面図】

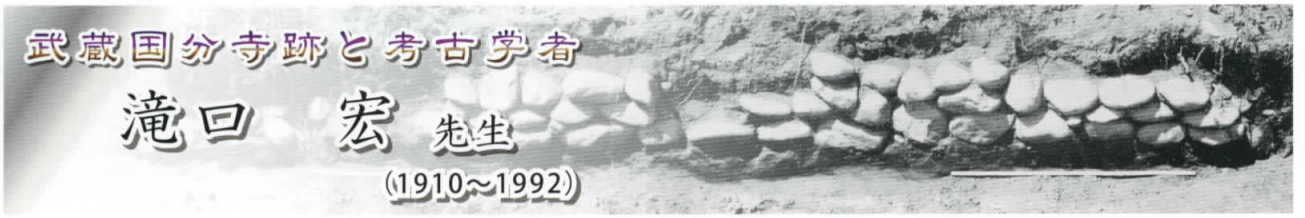


【修理後　梁行断面図】



【修理後　南立面図】

武蔵国分寺跡と考古学者
滝口　宏 先生
(1910～1992)



塔再建時の基壇線石組　－南より－（『武蔵国分寺図譜』より）

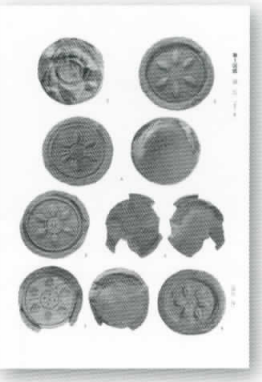
滝口宏先生は、明治 43 年（1910）に、東京で生まれ、早稲田大学文学部史学科を卒業された後、早稲田大学の教授・理事として活躍されるとともに早稲田実業学校の校長を務められました。日本考古学協会・日本歴史学協会の委員長として、また、目白学園女子短期大学学長・女子美術大学理事長を歴任し、国・東京都・千葉県・都下各市区の文化財保護審議委員などを務められるなど文化財保護行政にも尽力されました。

先生は、各地の国分寺跡の調査で多くの業績を残されましたが、中でも武蔵国分寺跡については、長年にわたって発掘調査を指導されました。昭和 31 年（1956）に日本考古学協会の仏教遺跡調査特別委員会（委員長：石田茂作）による本格的な発掘調査が行われた際に委員として参加され、その後も石田茂作先生を継いで、武蔵国分寺跡の発掘調査を積極的に主導されました。

昭和 38 年（1963）後半、史跡指定地内（尼寺跡推定地）に無断現状変更によって分譲住宅が立ち並び、尼寺の金堂基壇が削り取られて社会問題にまで発展した際も、発掘調査によって指定地域の標示を明確にし、史跡公園として保護するために尽力されました。昭和 39 年 3 月末から昭和 44 年 5 月の調査成果は、先生の『武蔵国分寺図譜』(昭和 41 年)、『武蔵国分尼寺』(昭和 49 年) 及び、『武蔵国分寺跡調査報告―昭和三十九～四十四年度―』（昭和 62 年）として報告されています。

七重塔跡の発掘調査（昭和 39 年）で説明される先生（写真左）

昭和 39 ～ 41 年まで行われた緊急の調査では、武蔵国分二寺に計画的に配置された建物の規模や構造、湧水各所を取り込んだ広大な寺地が明らかとなりました。



『武蔵国分寺跡調査報告―昭和三十九～四十四年度―』
日本考古学協会・国分寺市教育委員会発行（昭和 62 年）

『武蔵国分寺図譜』国分寺市教育委員会発行（昭和 41 年）

本の題字は当時の国分寺市長である星野亮勝先生の筆です。昭和 39 ～ 41 年の緊急調査を広く一般に報告するために編まれたもので「写真図版を通して、1200 年前の武蔵のひとびとの偉業を偲んで戴きたい」という滝口先生の思いが込められています。わかりやすい解説と多くの写真により、各新聞が販売や動向を取り上げて紹介するなど、高く評価されました。

新鮮な、そしてたくましい力を結集して
1200 年のむかし、この地に
壮麗な伽藍がつくられた
ひとびとは自らの力に驚歎した
諸国の及びもつかぬ規模
こだわりのない構想
それが武蔵国分寺を特色づけている

伝祥応寺跡の調査（昭和 44 年）で現地を視察される先生
（写真右から２人目）

その後、昭和 48 年には、市立第四中学校建設問題が起こりました。当時の学校建設予定地周辺は、雑木林や畑でしたが、僧尼寺の中間地域の南側にあたり、武蔵国分寺に関連する良好な遺構が残っている可能性が高かったのです。大きな保存運動が起こるなか、先生は最前線に立たれ、国分寺市へ武蔵国分寺の広域的な調査と保存の必要性を強く訴えられました。

この問題を契機として、昭和 49 年に寺域の確認を目的とした調査組織「武蔵国分寺遺跡調査会」（のちに国分寺市遺跡調査会）が発足、昭和 53 年には市に文化財課が、昭和 55 年には史跡の保存・整備を目的とする国分寺市史跡武蔵国分寺跡整備計画策定委員会が設置されましたが、これは先生の懸命な訴えなくしては実現し得なかったものでした。先生は引き続き、遺跡調査会の理事・副会長・調査団長、史跡武蔵国分寺跡整備計画策定委員会委員、そして国分寺市史編さん委員会編集委員として長く国分寺市の文化財保護行政で中心的な役割を果たされました。

先生は編著『武蔵国分寺跡』武蔵国分寺跡調査会年報（昭和 54 年）の中で、困難な状況でも国分寺市の市民憲章第一「わたしたちは文化遺産を大切にし、自然の環境を守りましょう」(昭和49年11月３日制定)という言葉に、発掘調査や文化財の保護を通じて「率直に応えたい」と記されています。このように先生が編集された多くの報告書の「はしがき」や「あとがき」には、東京の市街化に伴う土地開発と史跡保護を調和させることが難しい状況でも、文化財愛護の気持ちを持つ大切さ、そして理想像を描いて前進する視点と主張が伝わってきます。

今年、国分寺市は市制 50 周年を迎えます。滝口先生の尽力によって体制化された文化財保護のあり方を振り返りながら、今後も文化遺産を未来の子どもたちに伝えるため、武蔵国分僧寺跡の整備や、市内遺跡の発掘調査、市内文化財の保護と活用を図っていきたいと思います。

（増井　有真）

滝口　宏先生の主な著作等

主に歴史時代の考古学を専攻された先生は、古墳や古代寺院に関する論文を多く執筆されています。中でも天文学の知識を応用して伽藍配置の中軸線について論じられた「上代寺院における方位の決定について」は著名です。また、報告書の執筆・編集の他にも一般書や青少年・教養人向けの本も著されています。

― 主要著作 ―

- 『太陽系とこよみ』昭和 26 年（1951）
- 『土中の文化』昭和 28 年（1953）
- 『古代の探求』昭和 33 年（1958）
- 『はにわ』【共著】昭和 38 年（1963）
- 『新版考古学講座』８特論（上）祭祀・信仰【共著】昭和 46 年（1971）「古代寺院の占地と伽藍配置」
- 『新版仏教考古学講座』第２巻　寺院【共著】昭和 50 年（1975）「国分寺跡」
- 『勁艸（草）』―滝口宏随想録―　1993

― 編著 ―

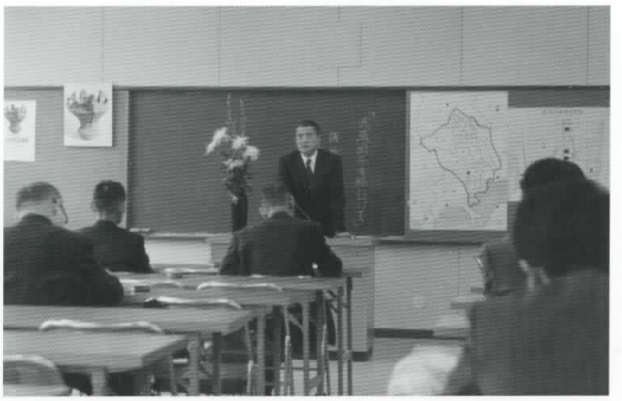
- 『上総金鈴塚』昭和 25 年（1950）
- 『落合』昭和 30 年（1955）
- 『沖縄八重山』昭和 35 年（1960）
- 『印旛手賀』昭和 36 年（1961）
- 『上総国分寺』昭和 48 年（1973）
- 『加曽利貝塚Ⅳ』昭和 52 年（1977）
- 『安房国分寺』昭和 56（1981）
- 『武蔵国分寺跡遺物整理報告書―昭和三十一・三十三年度―』昭和 60 年（1985）

― 論文等 ―

- 「上代方位決定考一・二」『古代』（第１・２号）昭和 25 年（1950）
- 「上代寺院における方位の決定について」『古代』（第７・８号併合）昭和 27 年（1952）
- 「武蔵国分寺址調査私見」『日本歴史考古学論叢』第２昭和 43 年（1968）
- 「序章　地と人と」「第四章　武蔵国分寺　第一・二節」『国分寺市史』上巻　昭和 61 年（1986）
- 「考古学と周辺科学　天文学」『季刊考古学』第 31 号平成２年（1990）

参考文献

- 「滝口　宏先生　年譜・業績目録」『古代探叢』Ⅳ　―滝口宏先生追悼考古学論集―　平成７年（1995）
- 坂誥秀一『トポスの考古学』平成 18 年（2006）
- 坂誥秀一『私の考古遍歴』平成 18 年（2006）



講演会「武蔵国分寺跡について」でお話される先生（昭和 47 年）

コラム vol.4 国分寺市内の銭湯

今回は国分寺市内の銭湯の歴史について紹介したいと思います。去る平成 25 年 1 月、本多地区にあった福の湯が閉店しました。福の湯は、昭和 32 年 2 月から営業を開始し、井戸から汲み上げた 100%の天然水を利用していた銭湯でした。

関係者によると、国分寺市内で最初に開業した銭湯は大黒湯（本町）で、昭和元年頃に始まっています。昭和 16 年 8 月に経営者が元・福の湯の店主に代わり、昭和 61 年まで営業していたということです。二番目は恵比寿湯（本町）で、昭和 20 年代から昭和 50 年代まで営業していました。三番目は福の湯、四番目が桃の湯（東元町）で、昭和 33 年頃から現在まで営業しています。五番目が花沢湯（南町）で、昭和 40 年頃から昭和 58 年頃まで営業していました。六番目が孫の湯（東恋ヶ窪）で、昭和 45 年頃から現在まで営業しています。同時期にえのき湯（戸倉）が昭和 42 年頃から平成元年頃まで続きました。最後に開業したのが富士本湯（富士本）で、昭和 50 年代から平成 4 年頃まで営業していたということです。

内風呂がある家屋が昭和 50 年代前後から増え、銭湯を利用しない人が多くなったことが公衆浴場の利用を減少させた理由の一つです。現在、市内に残されている銭湯は桃の湯と孫の湯の二軒のみとなりました。湯に浸かって他人と会話をし、着替え場では番台の女将さんと話し、飲み物などを飲んで涼む場が時代とともに少なくなっていくことは、さみしくも感じます。

（米村　創）

福の湯（本多）の着替え場（平成 25 年撮影）

福の湯（本多）の湯船と銭湯の絵（平成 25 年撮影）

武蔵国分寺跡資料館ご利用案内

※駐車場はありません

■交通のご案内

［電車］◎JR国分寺駅下車／徒歩約20分　◎JR西国分寺駅下車／徒歩約15分

［バス］◎国分寺市循環バス『ぶんバス』日吉町ルート「泉町一丁目」下車／徒歩約８分
◎国分寺駅南口より『京王バス』系統番号〈寺83〉・〈寺85〉乗車「泉町一丁目」下車／徒歩約８分

■開館時間

午前9時～午後5時（入館は午後4時45分まで）

■休館日

毎週月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）
年末年始（12月29日から1月3日まで）
※展示替えなどで臨時休館することがあります。

■入園料

資料館に入館するには「おたかの道湧水園」への入園料が必要になります。（入園券は史跡の駅で販売）
一般……100円（年間パスポート1,000円）
中学生以下……無料

〔入園料の減免規則があります〕

（1）学校の教育活動で生徒（中学生を除く）、学生及び引率の教職員が入園するとき〔事前（５日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
（2）身体障害者及びその介護者が入園するとき
〔発券窓口の史跡の駅で身体障害者手帳等の提示が必要です。〕
（3）その他教育長が特別の理由があると認めるとき
〔事前（５日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
※減免申請書は、国分寺市のホームページからダウンロードできます。

見る　学ぶ　訪ねる
武蔵国分寺跡資料館
Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

モバイルホームページ QRコード